

渡辺克巳

《ゲイボーイ、新宿》



渡辺克巳 (1941-2006)

《ゲイボーイ、新宿》

1969年

ゼラチン・シルバー・プリント

29.0 × 19.0 (30.6 × 25.3) cm

平成25年度購入

「流」

しの写真屋」という商売が、かつてありました。夜の盛り場をまわってポートレイトを撮影し、翌日焼き付けた写真を届けてお代をもらう仕事です。ここに紹介する写真の作者渡辺克巳は、一九六〇年代の後半から七〇年代の初頭、新宿で、「流しの写真屋」を生業としていました。

水商売の女性たち、ゲイボーイ、ヤクザ、ホームレス、夜の街でハメをはずす若者たち。渡辺のレンズの前には様々な人たちが立っています。

渡辺自身も岩手の出身でしたが、彼を「ナベちゃん」と呼んでたびたびそのレンズの前に立ったお得意さんたちにも地方出身者は多く、そうした彼ら、彼女たちは、撮ってもらった写真を故郷の家族に近況報告をかねて送ることもあったようです。

現在では携帯電話に高性能なカメラが搭載されていて、気楽に写真を撮れるばかりか、それを送信するのも簡単ですが、当時、渡辺のカメラの前に立った人たちは、「ナベちゃん」が撮った写真を介して、自分自身との、遠く離れた家族との、あるいは恋人との、様々なコミュニケーションを行っていたのでしょう。

そして写真家自身は、写真を介して新宿という街そのものとのコミュニケーションを試みていたようです。事実、今回収蔵した二十点の中には、必ずしも頼まれて

撮影したわけではない、新宿の様々な光景が捉えられています。渡辺は次のように記しています。

「新宿は巨大なマーケットであり、業種も変化に富んでいて、なぜだか、どんな格好をして歩いていても新宿の風景になじんでしまう。ゴミでさえ、ちゃんと居場所を主張していた」(渡辺克巳『新宿1965-97』新潮社、一九九七年、五頁)。

「流しの写真屋」という風変わりな存在さえも受け入れてくれる新宿の街と、そこに集まる人々に、渡辺は深く魅了されていた。

七〇年代前半、比較的安価なストロブ付きの自動露出カメラが普及しはじめるのと、「流しの写真屋」は商売としては成り立たなくなっていく。時を同じくして、渡辺は一九七三年、新宿で撮りためた写真をカメラ雑誌の公募欄で発表し、新進の写真家として注目されます。同年、写真集『新宿群盗伝66/73』を上梓。翌七四年には、当館で開催された「十五人の写真家」展の出品者のひとりに選ばれ、初の個展も開催しています。

「流しの写真屋」をやめた後、渡辺は焼芋屋や写真館の経営などを経て、雑誌の仕事の主とするフリーランスの写真家へと転身します。その間も、彼の写真の原点としての新宿の街を、渡辺は生涯撮り続けていきます。(美術課主任研究員 増田玲)